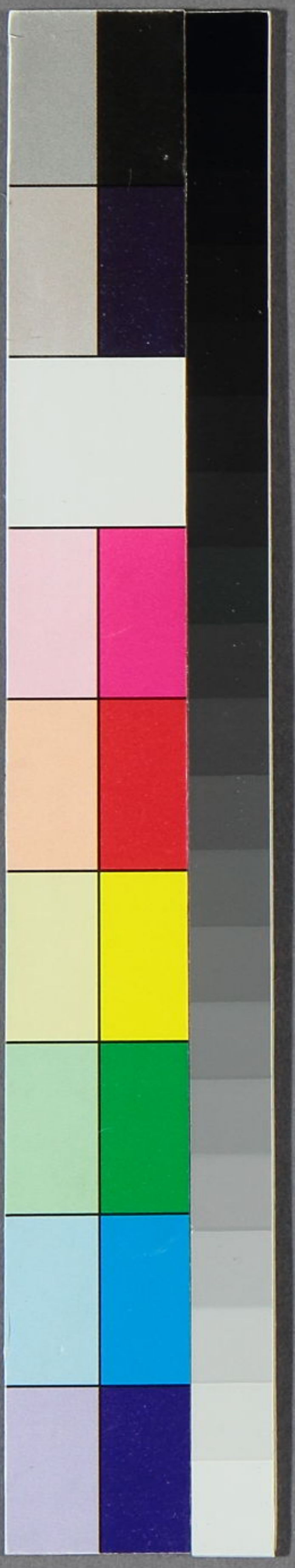


八代集抄

千載春上下友

三五

特別  
イ 4  
3163  
104(35)





貴  
14  
3163  
104(35)



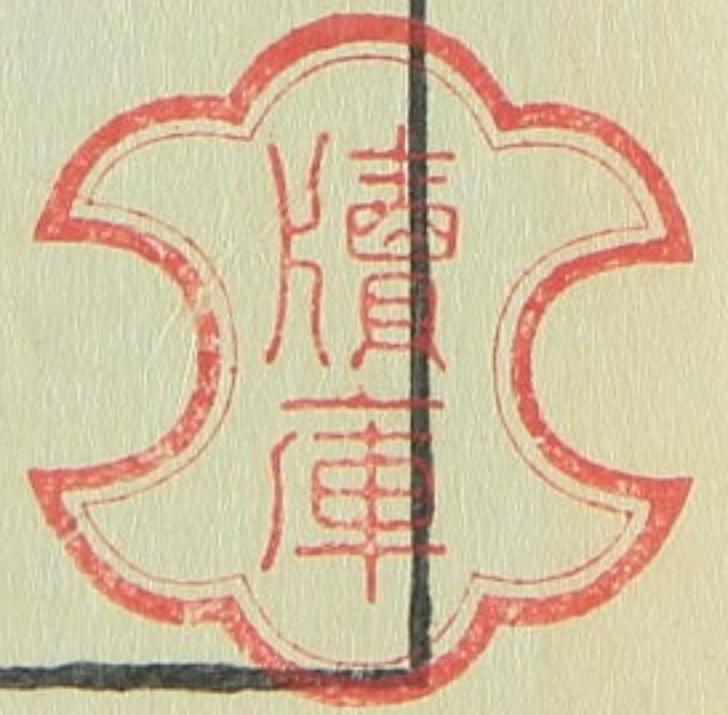
喜乃々々河々原  
船原大和也まの  
河々々々々々々々  
春立神日より原  
乃系氣時常の感  
情等ひやわく  
味と一  
今比乃山谷やまの  
二宮山にやお大和  
ままま。に空の

千載和歌集卷第一  
春舟上

喜乃々々河々原を  
見わたせ

源俊親朝臣

かますもくわく  
河院時百首舟  
中納言園信  
今比乃山谷やま  
乃立ねん  
雪乃下みま





雪も下解く思深  
よきしむらひ  
雪も下解く思深  
古今世よきしむらひ  
雪のたる路りして  
そを本尋らば雪  
りまの終結るうの  
よきしむらひ  
ぬきしむらひ  
みらしむらひ  
雪も下解く思深

百首尋らむりくの時  
とよめ  
雪も下解く思深  
の  
河院時百首乃尋らむりくの時  
残雪とよめ 前中納言匡房  
みらしむらひ  
雪も下解く思深  
兼曆二年内裏は雪乃尋らむりくの時  
とよめ 藤原政總朝臣  
は松平總  
春も下解く思深

春も下解く思深  
心明しぬき  
雪も下解く思深

山里乃かきぬき  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深

春も下解く思深  
雪も下解く思深  
後冷泉院時百首乃尋らむりくの時  
とよめ 大納言隆圓  
山里乃かきぬき  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深  
雪も下解く思深

源後朝臣











梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ

梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ

梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ

梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の花はさかすか  
雪の白はうしろ  
梅の香はさかすか  
雪の白はうしろ



冬三  
頭二月之雪落家歌

この本語をやつて

うら

梅うらうらがあられつ

梅香うら誰の社の子

うらあられつまじく

えれい月をまじく梅

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

梅うらうらがあられつ

梅香うら誰の社の子

源後道信朝臣

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

皇太后宮大夫後成

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

百首のあられつあられつ

よもせあられつ 崇徳院沖製

春乃あられつあられつ

梅うらあられつあられつ

梅花あられつあられつ

源後道信朝臣

梅うらあられつあられつ

梅香うら誰の社の子

源後道信朝臣

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

梅うらあられつあられつ

梅香うら誰の社の子

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ

うらあられつあられつ







片雲の大和を春あふ  
すみのうらやまのそ  
とくさるるや人のえ  
むとく春春あふの陰  
い潤の栞花又春の物  
さくさくあつりしに  
は富首花冠を思ひ  
しるまよふた野の  
山木の花はよほの  
野に一花ほふさあは  
のいよまのなまは

すみのうらやまのそ  
とくさるるや人のえ  
むとく春春あふの陰  
い潤の栞花又春の物  
さくさくあつりしに  
は富首花冠を思ひ  
しるまよふた野の  
山木の花はよほの  
野に一花ほふさあは  
のいよまのなまは

てし下向の心海へ  
すこもかき春あふ  
水傍に涙もた崩る  
あつらひに花あふも  
あつらひに春あふも  
のあつらひに春あふも  
春くれんこのむ  
田舎のりりしは春  
あつらひに花あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも

あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも  
あつらひに春あふも

菟原法精抄

近江守藤原経

早稲は春あ







東極のてらにありて

一本 東極のてらにありて

ありて師實のてらに

國自教通のてら

とていふてらにありて

山極のてらにありて

とていふてらにありて

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

わけありて師實のてらに

心明の詠詠 欲謂之

水則漢女施粉之鏡

清瑩 花先水上浮席

とていふてらにありて

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

わけありて師實のてらに

のてらにありて

のてらにありて

徳大寺のてらにありて

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

徳大寺のてらにありて

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

ありて師實のてらに

寛治八年のてらにありて











神垣乃とむるの心よ  
 御来りの内は深層者  
 雲のまじりて神の社  
 と六神垣と八花垣  
 をまじりて花を白木  
 綿よりえりしやわ  
 よすす花のまじり  
 心やまじり花のまじり  
 わらわい小あつらふや  
 覚性い鳥羽院才五宮  
 三品本仁親王出家は  
 名信法政覚性号紫  
 金堂寺 紹運派  
 はまねわとさうね  
 我る入花ゆをれ

花乃きりゆふゆきくさくさ  
 花思ふ花つらうら  
 仁和後入道法親王  
 よますう花乃あひをさひや  
 こころやみねりう様おまじり人  
 為縁山花とらうら心よりみねり  
 折政前太大臣 兼實公 忠通子  
 はまねわとさうね山流るるわらわ  
 我より花れ志ありありあり  
 為花日書わらうら心よりみねり

女一上

我をい花の志よかり  
 枝折はひよ入るゆの  
 まりいれ枝をわら  
 るのまじりて  
 著してねがひいれ  
 花のまじりてまじり  
 れいゆを花よま  
 と色  
 花ゆいよまじりね  
 山流るるも葉茂  
 ありれいもまじり  
 花のまじりて七八十  
 八首入るはまじり  
 して国をわらわ

源信親朝臣  
 著してねがひいれ  
 こころやみねりう様おまじり人  
 花のまじりてまじり  
 花ゆいよまじりね  
 まじりてまじり  
 春の心よ今春の心よけり  
 花の社乃あ合い人  
 花のまじりてまじり  
 推大納言安國  
 中納言号盛井



て又三首今も是 齋  
年をすくくし  
花ををすくくし  
あきなごころわに  
よきとくくく  
年とくし  
やうなれと我  
花より花より  
とほちす  
花さくわ 翠の  
春に花よ  
とくくく  
よく川  
喜根い  
去野り

年をすくくし  
うめより  
花さくわ  
春日乃社乃  
くくく  
うく川  
喜根を  
古く花

権中納言  
藤原之衛  
右近衛

大徳寺  
子大徳

ふ一 十一

けらみやまの  
花に  
乃  
と  
下  
年  
く  
八  
平  
あ  
さ  
昔  
心  
東  
と  
し

けらみやまの  
花に  
乃  
と  
下  
年  
く  
八  
平  
あ  
さ  
昔  
心  
東  
と  
し

徳人

徳子



もし花をばり

見りてあやむ

よかのゆきかた

まのよきもい

よきよき花の風

たをてよよと

よきよき花の

あやむ

若野の花のまわ

心ゆくは花を

大後とばかり

春とてく白ひを

毎春白くま

い花のは国を

やうとてく

園位法師

俗名義隆  
改西野

よきよき花の風

たまらぬとて

若原為葉

本名為憲子  
改名為葉

若野の花のまわ

心ゆくは花を

毎春花音

カウハシ

源仲正

金無作

金無作  
源仲正

春とてく白ひを

毎春白くま

とてく白ひを

よきよき花の

あやむ

よかのゆきかた

まのよきもい

よきよき花の風

たをてよよと

よきよき花の

あやむ

若野の花のまわ

心ゆくは花を

大後とばかり

春とてく白ひを

毎春白くま

い花のは国を

やうとてく

百首奇を

待賢院

よきよき花の

あやむ

よかのゆきかた

まのよきもい

よきよき花の風

たをてよよと

よきよき花の

あやむ

若野の花のまわ

心ゆくは花を

大後とばかり

春とてく白ひを

毎春白くま

い花のは国を

やうとてく



や伏見れ兼家之後七  
 に落しあふ小神祇  
 乃山は本寺の御え  
 よりわびの御え  
 乃山やあつた山  
 神中抄云乃山に遊  
 乃山日本紀云天智香  
 乃山乃名と同乃山優  
 瀬塞菅中云古仙靈  
 強伏藏地佐二名實  
 長等山と云畧註乃  
 乃山の御え  
 乃山の御え  
 乃山の御え

乃山やあつた山  
 又せしや人より乃山のさうわを  
 十首乃奇人よりよき世なり  
 時乃乃奇人よりよき世なり  
 皇太后宮大史俊成  
 乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え

乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え

乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え

乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え

予載和歌集卷第二

春舟下

乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え

白河院清製

乃山やあつた山  
 乃山の御え  
 乃山の御え















はらう花うきを  
花の身ふくし  
かひより花を  
とみあはれ  
死すし花を  
ねむりて  
花を可い  
さうん  
今うの  
花をみ  
吹しひ  
のまゆ  
あり  
一枝の  
心は

はらう花うきを  
花の身ふくし  
かひより花を  
とみあはれ  
死すし花を  
ねむりて  
花を可い  
さうん  
今うの  
花をみ  
吹しひ  
のまゆ  
あり  
一枝の  
心は  
源有房  
作者の  
伯孫  
名周法師

推中納言通親  
雅海子  
菅内寮

たませと一  
つとん  
ちる花を  
多幸  
可い  
えと  
花を  
はらう  
と花  
のこ  
はらう  
と花  
山さ  
花を

ちる花を  
まうく  
はらう  
花を  
山さ  
花の  
道令法師  
源仲綱  
從二位  
伊豆守  
山内  
山内











引けたる信田森の  
楠の葉は多枝にわら  
目しおをささるる  
本奇やうに明く  
こよいわれはなを  
小野乃其生るる  
何ぞ野の芝のよ  
るく其岸春乃  
野も草つてふれ  
我る野をまわり  
一敷わたりを  
本奇やうに  
さすすくく  
乙田小野山懐く  
さすはれとさす

おろし百首乃時すくれよよめ  
中納言國儀 大納言大長原房  
の子  
こよいわれはなを 中納言國儀  
の子  
よのささるる 中納言國儀  
の子  
修徳大史原季  
さすすくく  
志めとことと  
大兼二年辰乃まのまの  
兼子よめ  
源朝國朝長國儀  
るこを八野乃原れつ

て我在奥のふも  
ささるる  
入野名を  
道を入と  
春の形  
ゆんさ  
て  
春乃の  
山吹の  
わに  
の氣も  
わの  
やま  
公

ささるる  
堀川院乃所時の百首乃  
とよめ  
前中納言  
春乃の  
い  
お原  
やま  
井  
堀川院乃所時肥はる家  
よ















Handwritten text in cursive script, likely a list or record of names and titles.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or record from the top page.

三十一

Handwritten text in cursive script, likely a list or record of names and titles.

Handwritten text in cursive script, continuing the list or record from the top page.

Handwritten characters at the bottom left corner of the page.







時宗乃後様とせられ  
 一也るらりまき中  
 色かゝるまき中  
 衣入りなりまき中  
 物まき中  
 何れもまき中  
 春うわわれ  
 聖月よりまき中  
 うまき中  
 聖月よりまき中  
 小見りてまき中  
 るいあのみまき中  
 とあのみまき中  
 寶房 三條内本堂

崇徳院より百首乃并まき中  
 時宗乃まき中  
 色かゝるまき中  
 何れもまき中  
 入やうまき中  
 平むまき中  
 ひまき中  
 本乃まき中  
 首見乃まき中  
 大近大將寶房

11

号三條内本堂は名體堂  
 中月美乃のり  
 中花乃白あま  
 小見りてまき中  
 るいあのみまき中  
 とあのみまき中  
 聖月よりまき中  
 小見りてまき中  
 るいあのみまき中  
 とあのみまき中  
 寶房 三條内本堂

中月美乃のり  
 中花乃白あま  
 小見りてまき中  
 るいあのみまき中  
 とあのみまき中  
 聖月よりまき中  
 小見りてまき中  
 るいあのみまき中  
 とあのみまき中  
 寶房 三條内本堂























こもわうぬき村の  
比ねくふくつま  
えをいねわく心  
をいへくま  
千代こ人ひま  
あやめまか  
けりけく様ねの  
枕小宮殿とよま  
よし必り  
ねとねの風俗とよ  
小宮殿ふせめ様  
ねの枕りといり  
のこせいの  
さすれよね  
沼乃岩垣と波の

雅通云  
久我内大臣乃家少く様有富  
藩といつて心よめく  
中納言雅通

前中納言雅通

千代こ人ひま  
あやめまか  
けりけく様ねの  
枕小宮殿とよま  
よし必り  
ねとねの風俗とよ  
小宮殿ふせめ様  
ねの枕りといり  
のこせいの  
さすれよね  
沼乃岩垣と波の

権政お右大臣

さすれよね  
沼乃岩垣と波の

内大臣良通  
九条  
後冷泉院

こえの宮殿ひく  
もろねい  
とあ  
一品内親王 尊子  
後一条院皇女  
中宮威子道長女  
後冷泉院后  
二条院  
皇太后文のみ  
批把皇太后宮  
道長女三  
み  
風よちる花

のま  
ねを  
後朱雀院乃  
一品内親王乃  
一  
中  
風よちる花

後朱雀院乃  
一品内親王乃

一品内親王乃

一

風よちる花

中

風よちる花



五枝の香は袖を  
ため白りせしに下白  
心明し人丸入野の露  
初尾せいつら梅の  
自枕よせんと後  
おしりけりもせ  
うきや中乃いよふ  
いよふいよふと  
わらやよの花梅の  
凡のこころいよふ香と  
かりしあれ花梅の  
花梅の香を帯りし  
音のり小言と夢  
又しおし今入  
感懐のり心と七

うきや中乃いよふ宵れひし  
といふせきくふりよし  
わらやよの花をらまよふ風を  
いよふとよふといれあひん  
花梅葉枕といつるこころよ  
おしりし梅花梅のかあるくか  
じりよとつるいよれま

藤原家基 集賢守家光子  
刑部少輔

良女親宗

藤原公衡朝臣

あふれよ花梅の  
二月の月をまじ  
うきよし花梅の香  
のあつしつら梅の  
こころをされく月  
すし秋のよとる  
たまこころ  
ふりあふまひい  
白氏文集十七庐山  
草堂夜雨独宿乃  
詩は庐山雨夜草  
菴中と自樂天乃  
作りしよしは月  
ふれよいよふ香  
や

百首寄りたる時花梅の香と  
よませ給る 崇徳院清和  
あふれよ花をらまのりあふ  
月すし秋もさとし何しあれ  
歌よし  
葉親王補仁 後三葉  
皇子  
あふれよおしりよふれあふ  
葉乃いあられよそのさひ  
梅河院乃は時百首の香を  
くこころいよふ月ふれ香  
よめる 藤原基俊











































